



●古写真DATA●

長崎大学附属図書館蔵

- ◎目録番号:2837
- ◎撮影者:撮影者未詳
- ◎撮影地域:大阪
- ◎年代:年代未詳
- ◎色彩:カラー
- ◎形状:258x202
- ◎整理番号:57-5-0

ホームページでもご覧いただけます。

<http://hikoma.lb.nagasaki-u.ac.jp/jp/>

【天神橋(1)】

Tenjin-bashi Bridge

〈解説〉

日本の都市の中で目に見える近代化は、鉄製の橋の建設から始まると言える。近代化の原動力の象徴は「鉄」の生産である。鉄製の日本の最初の橋は、明治元年(1868)に架設された長崎市の「鉄橋」(橋長・12間(21.6m))である。次いで、明治2年(1869)横浜市に吉田橋(橋長・13間7分(24.6m))、通称「つのはし」が架設された。材料の鉄は国産であったが、大量生産されたものではなかった。その後、大都市や居留地を中心に、ドイツ・イギリス・アメリカから輸入された鉄製の橋が架設され、近代化の象徴としての鉄の構造物が街の中に見られるようになる。

写真は大阪の「天神橋」を写したもので、撮影年代は古写真が出回った末期に近い明治25年(1892)頃である。明治18年(1885)7月、大阪市淀川で大洪水が発生し、主要な橋27橋が破壊された。その後洪水で流失しにくいように、明治21年(1888)までに、天満橋、天神橋、木津川橋、渡辺橋、肥後橋の五大橋が鉄製橋として架設され、その中の

「一橋が「天神橋」である。ドイツのハーコート社から輸入されたボーストリングトラス橋であり、最長径間が66mであった。明治時代の日本のトラス橋は長い順に、①大阪市内の天神橋、130間4分(235m)、②天満橋119間9分(216m)、③群馬県の坂東橋114間7分(206m)、④東京市内の吾妻橋113間7分(205m)であり、この「天神橋」は明治時代の道路橋として最長のものであった。同じころ、長崎市では中島川の河口にアメリカから輸入された、「新川口橋」が明治23年(1890)に架設されている。

写真から分かるように、赤い煉瓦の橋脚の上に、重厚感のある鉄製トラスが架かり、近代化する都市の威容を示している。古写真は、日本を訪れた外国人の土産物として本国に持ち帰られたが、幕末の初期の古写真は、欧米と比べて原始的な生活をする極東の「不思議な国日本」を紹介していた。それから30年後の古写真では、鉄道を持ち、西洋風ホテルや、近代的で長大な橋を建設する技術を有する、世界に例がないスピードで近代化を進める日本が被写体として紹介されている。